

Title	「諫諍」の成立と展開
Author(s)	前川, 正名
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44782
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	まえがわ まさな 前川正名
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第18297号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	「諫諍」の成立と展開
論文審査委員	(主査) 教授 湯浅 邦弘 (副査) 教授 高橋 文治 教授 榎本 文雄

論文内容の要旨

「諫諍」とは、たとえ相手の意に逆らっても、目上の人の非を改めさせようと言いつ争うことをいう。

本論文は、思想史研究の立場から、中国古代における「諫諍」の思想の成立と展開について検討したものである。全体は、対象とする文献に沿ってほぼ時代順に区分され、本論は、「春秋時代の「諫諍」について」「戦国時代における「諫諍」について」「秦・漢(前漢)における「諫諍」について」「後漢における「諫諍」について」の四章からなり、冒頭に、先行研究の状況をまとめた「序論」、末尾に、本論を総括した「結論」を配置する。

まず序論では、中国思想史の重要語である「忠」「孝」概念の検討が『孝経』を中心に行われてきたものの、それらと密接な関係にある「諫諍」については、あまり論及されてこなかったこと、また、その理解が、『論語』『孟子』『荀子』『孝経』のみを手がかりとして極めて単純に捉えられてきたことなどを指摘する。

その上で、本論では、改めて、それら諸文献における「諫諍」の用例を精査し、各々の意味を再検討するとともに、従来の研究ではほとんど取り上げられることのなかった『墨子』『晏子春秋』『韓非子』『白虎通義』などの用例に注目し、検討を進める。

その結果、従来、「諫諍」が父子間の「諫諍」と君臣間の「諫諍」に大別された上で、父子間のそれが、穏やかに非を論ず「微諫」から厳しく正す「強諫」へと変化し、逆に、君臣間のそれが、「強諫」から「微諫」へと変化したと図式的に捉えられてきたことを批判し、古代中国の「諫諍」が単純な強弱論で捉えられるものではないことを明らかにした。また儒家の諫諍論の特徴が父子間の諫諍にあったこと、『韓非子』の諫諍論には、諫諍を受け入れる側(君主)の資質に注目する見解があったこと、『白虎通義』には、漢代における儒教国教化を受けた諫諍論の集約が見られること、などを明らかにする。

論文審査の結果の要旨

本論文は、これまで先秦時代の儒家文献を手がかりとして断片的に捉えられるに過ぎなかった「諫諍」の思想に注目し、その成立から後漢時代に至るまでの展開を追究した意欲的な研究である。従来の極めて単純な図式的捉え方が本論文によって是正されたことは大きな収穫の一つである。また、本論文が、『墨子』『晏子春秋』『韓非子』など他

学派の重要文献に注目し、そこから改めて儒家の諫諍の特色を指摘した点も重要である。さらに、諫諍が後漢以降も諸文献に見られ、むしろその事例を増加させていくことを考えれば、本論文の成果は、さらに漢代以降の国家論、家族論などを考える際にも、重要な指標を提供することになる。

ただ本論文では、各章において取り上げられる文献の資料的問題がやや棚上げされている印象があり、時代と文献との対応関係が不明確な部分もある。また、『墨子』や『晏子春秋』などを積極的に取り上げ、その諫諍の特徴を指摘するのは良いが、なぜそうした諫諍論が形成されたのかという思想史的分析がなされないなど、今後の課題とすべき点は多い。

とは言え、本論文は、言わば「諫諍の思想史」を発見した画期的研究であり、「諫諍」が中国古代思想史研究の重要な指標となることを明らかにした。よって、本論文を博士（文学）の学位に値するものと認定する。